

展覧会レビュー

Konohana's Eye #4 小出 麻代 展「空のうえ 水のした 七色のはじまり」

(2014/06/06 ~ 07/20 : the three konohana@大阪 此花区梅香)

<http://thethree.net/>

私は版画と言う表現技法が好きである。版画は、一旦何らかの媒体（版）で表現したものを、改めて別の媒体へ二次的に移行して表現する技法である。ここで用いられる表現媒体には、一次側も二次側も制約は無く、あらゆる技法や素材に寛容で、何でもありな面白さがある。

版画はアイデアを生み出す「アーティスト」と言う側面と、版を作る「職人」としての側面の、その二面性が揃ってはじめて成立する表現である。版画を学ぶと言うことは、その二面性を両立させる術を学ぶことであり、それは最終的な作品だけでなく、その過程をも含めて一つの表現となっている。それゆえに版画出身のアーティストの多くは、求道者のようにストイックに己の表現手法を追い求めていく傾向にある。今展の**小出 麻代 (KOIDE Mayo, b.1983)** もそんな作家の一人と言えるだろう。

彼女は日常の「もの」への関心が強く、大学で版画を学んだ後、当初は版画の技法を中心に、手仕事の要素を既製品に織り込むことを意識した作品を、多数発表していたそうだが、近年では版画技法は影を潜め、「もの」そのものを用いた表現による、インスタレーションへと変化していった。だが今展示を見る限り、そこにはれっきとした版画の精神があり、決して版画を離れたわけではなかったことが読み取れる。



会場で先ず目に付くのは、部屋の中央に立ち上がるシート紙。周囲に張り巡らされた糸。壁の所々に配された何か。部屋は薄暗く、窓からの光で作品は逆光。明らかに異様な展示である。訝しげに思い、室内を巡ると、シート紙の裏には回り灯籠が置かれ、壁にはサイアノ写真が飾られている。これらに通じるものは何か？なるほど、謎を解く鍵は光だ。

立ち上げられたシート紙の裏に写るのは、灯籠の灯りと、窓の明かり。窓下を通行する車両、天気の移り変わりや時間の経過、それらとともにこれらは変化する。さらによく見ると、シート紙には三角の小穴が多数開けられ、わずかに光が漏れている。何れもその物自身ではなく、そこに降り注ぐ光によって初めて成り立つ、二次的表現である。

さらには全体を構成している「もの」を繋ぐ象徴とも言える「糸」も、蛍光色や銀ラメのものを使用しており、共に自身の色そのものではなく、そこに当たる光によって、二次的に表情や自己主張が浮び上がってくる色である。そして光の集積とも言えるサイアノ写真を配すことで、見るものに光の存在を認識させ、意識を誘導していく。実に高度に計算された、「光の絵筆」を用いた作品と言えるだろう。

さらに奥の和室の展示では、開け放された裏口を通じ、背後の住宅街へと連なる演出がなされている。これはこの展示が、ここ「此花」の地とこの会場、ひいてはこの作品そのものが、この地と繋がっていることを示している。彼女が見た、この町の表情が表現されているのである。

一見ただけでは版画とは無関係に思えるが、光の絵筆によって二次的に描かれた作品を、平面に定着させるのではなく、空間に拡散させインスタレーションへと発展させた、差し詰め空間版画とでも言えましょう。ただし、「気に入ったので、一枚買って帰って壁に飾ろう。」というわけには行きませんね。

(文責：丹)